

氏名（本籍）	ガーダ アブディルカリーム アブディルアジーム イマーム Ghada Abdelkareem Abdelazeem Emam（エジプト）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第 71 号
学位授与年月日	令和 5 年 3 月 31 日
学位授与の要件	久留米大学大学院学則第 14 条 1 項第 2 号による
学位論文題目	アラブ現代詩と日本現代詩の比較研究-シイルグループと荒地グループを中心に-
論文審査委員会	主査 久留米大学教授 大庭 卓也 副査 久留米大学教授 桑野 栄治 副査 久留米大学客員教授 浦田 義和

## 論文内容の要旨・要約

### 第一章：伝統詩から現代詩の誕生と発展へ

本章では、アラブ現代詩と日本現代詩がどのような歴史背景に基づいて発展してきたかを紹介する。

まず、アラブ詩と日本詩の歴史的背景を概説する。歴史的背景は、両方の詩が古典的な伝統詩から近現代詩までへの発展の概要を示すことを目的としている。

それに、本章では、両方の詩に現代化がどのような影響を与えているのかを解明にした。

### 第二章：双方の詩に於ける西洋現代詩影響

本章の目的は、現代詩の技術的側面がアラブ現代詩と日本現代詩の両方の詩に見られるかどうかを確認することである。筆者は両方の詩における西洋詩の影響を類似点として観察する。

アラブ現代詩も日本現代詩も西洋世界に行われた新しい詩の運動の影響を受けた。過去の伝統的な詩が放棄または変換され、主要な新しい詩が作成された。このような影響の例として、両方の詩におけるエリオットの「荒地」の大きな影響を挙げる。

次に、現代詩の技術を通して、両方の詩における新構造としての類似点を明確にしたと考える。

### 第三章：アラブ現代詩のシイルグループと日本現代詩の荒地グループに於ける世界観と死のイメージ

本章で荒地グループとシイルグループの世界観を明らかにし、両グループがどのように世界を描いたかを詩に於ける死の主題に焦点を当て、敗北後の崩壊と破壊を詩的にどのように描写したかを明らかにした。

両グループの詩で共有された死と喪失感に満ちた世界のイメージを比較し、彼らの詩に大きな影響を与えた。両グループが完全に閉鎖され、逃げ道のない世界などのようなイメージを使用し、当時の世界に於ける死と喪失感を表現した。

### 第四章：双方のグループに於ける個人性と社会性

本章で、荒地グループとシイルグループの対照分析を通して、両方の詩における個人性と社会性を解明した。

両グループは、個人の自由が芸術的な自由の唯一の保証であり、作品の独自性と価値を保証する唯一のものであると信じていた。詩が社会意識の再構築にも積極的な役割を果たさなければならないと強調した。本章は、集団的イデオロギーに対する両グループの立場の類似性を探求し、両グループが求める詩の社会的な役割を検証する。

## 第五章：双方のグループに於ける詩の概念とその機能

荒地グループとシイルグループは、絶望と破壊に満ちた第二次世界大戦後の同様な状況の中で活躍していた。この状況は両グループに、自分の文化における文学的状态に疑問を投げかけさせた。詩とその機能のすでに確立された概念と視点を再考するように導いた。

本章は、詩の概念とその機能に対する両グループの立場の類似性を探求することを試みて、両グループの芸術的な概念と視点に光を当てようとしている。

## 結論

このような対照研究に基づいて、両方の詩における類似点を明らかにしたと考える。

本論では、日本現代詩とアラブ現代詩の様々な対照分析を通して、両方の詩に現代化がどのような影響を与えているのかを解明にした。

## 論文審査の要旨

ガーダ氏は、この度久留米大学大学院比較文化研究科に博士論文「アラブ現代詩と日本現代詩の比較研究—シイルグループと荒地グループを中心に」を提出し、認められ、文学博士号を取得した。

論文はA4で総ページ数200ページを超す大部なものであり、アラブ近現代文学と日本近現代文学の比較研究というテーマは、比較文学研究において嚆矢となる研究である。

本論文のいくつかの章は、査読付き論文として学会誌に掲載されている。

このように本博士論文は新しい研究テーマに取り組み、アラブ世界と日本における文学研究の開拓と進展に寄与するものである。

## 審査結果の要旨

令和4年(2022年)12月9日(金曜日)11時00分から11時30分まで御井学舎本館において開催された公開発表および12月21日(水曜日)16時から開催された口頭試問およ

ガーダ アブディルカリーム アブディルアジーム イマーム

びその後の審査会により、Ghada Abdelkareem Abdelazeem Emam 氏の論文が博士(文学)の学位に値する研究であることを、審査委員会は全員一致により確認した。